

「ふるさと春日井学」研究フォーラム

Forum for Furusato Kasugai Studies

「ふるさと春日井」地域活性化・まちづくりへの応援

メッセージ

会報

NO. 10

2013.11.16発行

編集責任：河地 清

Kawachi-k@mb.ccnw.ne.jp

第9回「ふるさと春日井学」研究フォーラム

テーマ『ふるさと春日井の近代』

『ふるさと春日井の危機を救った林 金兵衛』

11月3日（日）市民活動支援センター（ささえ愛センター）において第9回「ふるさと春日井学」研究フォーラムをテーマ『ふるさと春日井の近代』で開催しました。

『福沢諭吉と林 金兵衛』と題して、名古屋学院大学大学院経済経営研究科非常勤講師河地 清氏と『ふるさと春日井の危機を救った人々』と題して、春日井市古文書研究会会長 近藤 雅英氏に発表していただきました。市民40名が熱心に参加し質疑応答がありました。



発表者：河地 清氏



発表者：近藤 雅英氏



「ふるさと春日井学」講座で紹介

○…春日井市春見町の市民活動支援センターでは、市の歴史や文化などを紹介する「ふるさと春日井学」の第9回研究フォーラムがあり、市民40人が参加した。

名古屋学院大学大学院の非常勤講師、河地清さんが「福沢諭吉と林金兵衛」と題し講演。林金兵衛は明治時代初期、当時の春日井郡で起きた地租改正反対運動の指導者。つてを頼って福沢諭吉に助力を求め、嘆願書の添削指導を受けていた。

河地さんは福沢が林に送った手紙などを示し、「福沢と連携し、犠牲者を出さずに運動を収束させた」と説明した。

(蓮野亜耶)

ミントを使い、林金兵衛について福地さん「春日井市春見町の市民活動支援センターで

地租改正反対運動を無血収束「林金兵衛偉大な功績

—発表要旨—

河地清氏による「福沢諭吉と林金兵衛」は福沢諭吉が林金兵衛らの地租改正事務局への嘆願とその収束に関わったのかに焦点をあわせた研究報告であった。河地氏は1981年11月刊行『東海近代史研究』第3号の「特集・自由民権百年」に「林金兵衛の生涯—草薙隊と地租改正反対騒擾を中心に—」を寄稿し、1982年12月刊の第4号に「林金兵衛と春日井郡四十三カ村地租改正反対運動—福沢諭吉との関連をめぐって—」を寄稿している。その後も、「地租改正始末記」や「自力更生運動と儉約示談」「自力更生と自立社の設立」「福沢諭吉の愚民観」などの研究発表を続け、1999年10月には『福沢諭吉の農民観—春日井郡地租改正反対運動』（日本経済評論社）を著された。最近では愛知県史のための林金兵衛研究目録の執筆担当をされた。

さて、福沢諭吉と春日井郡の地租改正反対運動での金兵衛と諭吉との出会いは、明治11年2月、諭吉縁類の静岡県士族石川策の骨折りでの面会に始まる。3月に地租改正事務局への「哀願書」提出するにあたって、諭吉の助言が「歎願之始末手控記」に記せられている。「兎に角初願ヲ為シタル上に面談スベシトノ事」と、第1回目の歎願にすでに助言が始まる。「最初から尻押しはしない」という関り方だった。その後、①17～8回も指導してきた。地租改正事務局総裁の大隈重信への幾度もの書簡、林金兵衛宛への書簡などかなり手を尽くしている。今回の講演資料に明治11年10月15日に書かれた「秋冷の候益清穆（ぼく）奉拝賀。陳（のぶれ）ば更訂の一條も彌以志願の通りに相始候よし。…此度の一條もこれまでに参りしは實に上出来なり。此機を失して再び破裂しては最早手の付け様は有之間敷、何卒堪忍に堪忍して治まり候様奉祈候。…」の書状が添付された。しかし、書状日付の翌日、地租更訂による利害対立で反対運動の結末が崩れ、10日後には三階橋事件が起きている。「秋冷の候」の書簡は結果的に「上出来」の評価は誤ったが、その書簡の最後に「今朝も其筋の人物への面會、様々話合いたし候」とあるように諭吉は背後で解決に向けて動いている。明治12年1月の6度目の歎願却下の後、郡長天野と第一区長吉田の調停の動きも大隈の斡旋工作の表れで、その背後に諭吉の働きかけがある。旧藩主慶勝の「救助金」5万円の借受で解決するまで、福沢諭吉にコントロールされ、その意を受け忠実な実践者としての林金兵衛があった。福沢の指導と金兵衛の実践という関係に視点を置き、春日井郡の地租改正反対運動を見つめようというのが河地報告の主張であった。

交詢社と地域結社の自立社（下総の小川武平）・自力社（林金兵衛）についても触れられたが、紙面の都合で省く。参加者の中に中部大の森田朋子准教授がみえ、最近の林金兵衛研究が進んでいることにふれられた。中部大と名古屋大の共催シンポジウムで「林金兵衛とその時代」が2011年12月に開かれている。慶応大の西澤直子教授、名古屋大の羽賀祥二教授と中部大の森田朋子准教授がパネリストだった。春日井における近代の意味の問い直しに挑まれている。

2つ目の講演は、近藤雅英氏（春日井古文書研究会会長）による「春日井郡の危機を救った人々～飯田重蔵・藤田與七・林八十八」。近藤氏は『春日井の空、鐘は鳴らすな—小説・林金兵衛（地租改正歎願始末記）—』（1991.10、羅針社）の著者。巻末の参考資料には17冊もの文献が載る。緻密な調べで書き上げられた。古文書解読研究もここから始まるという。林金兵衛の地租改正に対する考えは「歎願始末記」にあるように、地租改正の「手続きがおかしい」という主張で「改正反対運動」ではないという観点に立つ。安

場県令は本来の1筆1筆の積み上げではなく、郡全体・村全体での総額から割り振り決める方法をとった。飯田重蔵は金兵衛に5日遅れて東京に着いた。彼は地租改正事務局副総裁前島密にも会っている。「請書」は出せないと頑張ったのが重蔵だった。天皇直訴の時も金兵衛と一緒にいた。東京から帰村して村人の説得にあたった重蔵。金兵衛の辞職後に郡詮評議員になる與七。6倍の増税になる下津尾の林八十八は「神明に賭してもついてく」と金兵衛に誓う。その後、彼は北海道八雲に開拓移住した。他、高蔵寺村の戦線離脱の真相についても調査中。従来の研究にはなかった事実の発掘が氏によってなされている。

(文責：塚田 忠雄)

林 金兵衛はなぜ福澤諭吉に出会えたのか？

FORUM 終了後、会員 S 氏から質問があった。「なぜ金兵衛は福澤諭吉に出会うことが出来たのでしょうかねー？」いい質問です。「偶然なのか必然なのかという問題です。」

この問題については、拙著『福澤諭吉の農民観－春日井郡地租改正反対運動－』（1999年 日本経済評論社）補論：「時代と人間の出会い－福澤諭吉と出会った二人の農民指導者－」の中で述べているので要点のみ述べておきたいと思います。

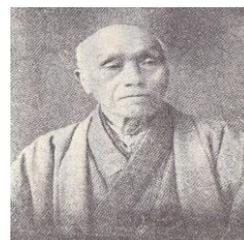
二人の農民指導者（林 金兵衛と小川武平）が福澤諭吉に出会ったことは、決して偶然の出来事ではないと論じた。何故ならば、林も小川も、当初から福澤諭吉に会うことを目的とはしていなかった。であるにもかかわらず出会えた要因は何か。決して「偶然的邂逅」ではない。その要因は、①二人が福澤とであった時期は武平が明治7年、金兵衛が明治11年で、ほぼ同時代期である。②両者とも、村落の土地租税問題という社会問題解決解決の困難さを抱えていたという点で共通した状況に置かれていた。③福澤の出会いに導かれて行く状況も共通していること。林は、旅館三河屋の主人石井与衛門に、小川は、旅館大浦屋の主人岩波長蔵に出会うことによって、「出会いが生む出会い」をつくりだしたこと。④金兵衛は石井の口利きで福澤の縁者石川策を通じて福澤と出会う。小川は、岩波に促され、夜店で買った「学問のすすめ」に触発され福澤門下の軍医栗田胤顕を通じて福澤に出会う。



林 金兵衛



福澤 諭吉



小川 武平

置かれた状況の類似性と、なによりも二人の農民からほとぼしりである強烈な「覇気」、「義気」は、デスペレート（必死）な「気」を周囲の人々にもたらしたと考えれば、それは新たな「出会いの契機」を連続的に創り出していった、必然性をもったものであると説明した。出会いの **Key Word** は、「気」ということなのかなと今は、考えている。金兵衛の口癖「なんとかせにゃーいかん」という言葉は、金兵衛の日常の意識であり、それに伴う行動が出会いの必然を導く源泉となったと考えたい。最新の研究に、「Serendipity」論という分野がある。人間の「偶察力」を脳生理学の面から考察した研究である。なぜ出

会えたか？を解く別の考え方として注目している。(文責：河地 清)

OPINION

— 歴史資産喪失の現実を考える —



在りし日の上條城 (林 金兵衛生家)

現在のの上條城跡 (駐車場)

上條城は、建保6年(1218年)に佐渡国出身、小坂光善が築城した。その後に小坂家(林家)は近江国に移り住んだ。南北朝時代初期には上条入道が支配していた。

800年余守り続けられてきた貴重な歴史資産も諸条件の要因から上記の写真のように消え去る運命になるのが現実である。

歴史資産を守り保存することとはどのようなことか、いつの時代にも考えてゆかねばならないことである。「一度失ったらもう二度と創り出すことのできない文化財、歴史資産の保存に努めることは千数百年の文化を大切にすることにとどまらず、今を含む歴史を大切にすることを重視することである。」「歴史を疎かにする者に未来はない。」とは、先人からの教訓である。「予算がない、資金がない、行政が・・・」という以前の意識(歴史認識度、文化度、文化受容度)の問題が問われる。

誰の責任ということではなく、市民の手で地域の貴重な資産を守れなかったことの悔しさが残る出来事である。

我々の地域周辺には、まだまだ幾つもの残して行きたい歴史建造物、遺跡、自然、文化が存在している。それらを再発見し、再評価して後世に残し、引き継いでゆくことへの不断の努力と意識(ふるさと意識)があれば、今後貴重な地域の資産は守られて行くであろう。地域の歴史、地域の文化的特色は、そこにしかない **Only One** の財産=資産であることを認識することは、新しい価値の創造でもあり、その価値を生かして行くことこそが、これからの新しい「まちづくり」(地域再生・活性化)の考え方であると思っている。

(文責：河地 清)

かすがい市民活動情報サイト : <http://kasugai.genki365.net/>

ふるさと春日井学 検索 

